

# アントタッチャブルと呼ばれた 平成最強の元プロボクサー

川島ボクシングジム会長 川島郭志さん

〃平成最強の男・アントタッチャブル〃の異名で知られた元プロボクサーの川島郭志（かわしま ひろし）氏（52歳）。

アントタッチャブル、つまり触れてはいけない人、触れることができない領域にいる人。そして、〃触らせない〃人である。

プロ戦績20勝（14 KO）3敗、KO率58・33%。日本スーパーフライ級王者。防衛3回で返上。WBC世界ジュニアバンタム級（現スーパーフライ級）王座、6度の防衛。

この華々しい戦績が彼の現役時代を物語る。

世界戦の翌日、ニュース情報番組に出演し、キャスターの久米宏氏に「前日にボクシングをしたとは信じられないほど、顔がきれい」だと言われたほど、相手に

打たせなかった。それはスリッピンング・アウエーと呼ばれる高等な防衛技術で、彼によって世間に知られるようになった。

物心ついた時には、既にボクサーになるべくトレーニンングをしていた。徳島

県の南東部にある海部町（現・海陽町）で理髪店を経営していた父親から、5歳違いの兄（元プロボクサー川島志伸）とボクシングの英才教育を受けて育った。

「その頃、日本人の世界チャンピオンは具志堅用高選手しかいないこともあったので、それは寂しいねとよく親子で話してました。それで僕が頑張って世界チャンピオンになるって言うってたんです」  
海部町にはボクシング好きがいた。

父親は海部ボクシングクラブを作り、大人も子どもも集まってきた。自宅の軒と軒の間に木を渡し、チェーンを使ってサンドバッグを吊るした。

憧れの具志堅選手がサウスポーだったこともあり、右利きだった川島さんはサウスポーを選んだ。

「トレーニンングで一番よくやったのは走ることですね。走るのは基本だから毎日走ってました。近所の人も、僕が試合で勝った時に、どんな子どもだったかと誰かに聞かれると、ボクシングやってた子〃ではなくて、〃あの走ってた子〃って言うくらい（笑）」

父親の英才教育の下、ボクシング親子鷹で成長してきたようにも思えるが、父親への反発もあったようだ。

「中学時代に、夜家を抜け出して友だちの家に遊びに行った。でもすぐにバレて、すごく怒られました」。とはいえ、





思春期真っ盛り。人一倍勝ち気な反抗期の彼に、素直に父親に謝るという選択はなかった。さすがに家を追い出されはしなかったが、以降、牛乳配達や新聞配達、廃品回収などのアルバイトを掛け持ちし、自分で学費を支払い、さらには食費として3万円家に入れるなど、自立心が大きく育った。

「今思えば、あれはオヤジが煽ることで、よし、やってやるよ、って僕に思わせようとしたんでしょうね。バイトは辛くはなかったです。むしろ、どれもボクシングのトレーニングだと思ってやってましたから」

海南高校3年のとき、全国高等学校総合体育大会（インターハイ）でボクシングのフライ級に出場。準決勝で前年度ライトフライ級優勝の鬼塚隆（後のWBA世界スーパーフライ級王者・鬼塚勝也）を、決勝で渡久地隆人（後の日本フライ級王者ピューマ渡久地）に勝って優勝。実は高校にボクシング部はなかった。彼のために学校が出場させてくれたのだ。

北海道でインターハイに出場しているときのこと。東京の米倉ジムからスカウトが来た。「後で知ったのですが、



オヤジが、うちに強い、いい選手がいる。ってあちこちのジムに手紙を出して宣伝してくれてたんです」

高校卒業後、大学にボクシング進学する選手もいる。彼も、ボクシングの強い10に余るほどの大学から誘われもした。ただ、その場合、大学の部活にありがちな先輩後輩の序列や、ことあるごとの飲み会などお酒で潰された選手も多いというわさもあり、純粹にボクシングに没頭できる環境が欲しかったため、進学は考えなかった。

米倉ジムは北海道だけでなく沖縄国体にもスカウトに来た。そして彼の気持ちは固まった。

米倉ジムに所属を決め、そのお披露

目は、全日空ホテルの広間で金屏風の前行われた。「米倉会長に、世界チャンピオンにもなれると言われてすごく嬉しかったですね。よし、頑張ろう、絶対になってやると思っていました」

上京し、上野毛の寮で一人暮らしを始める。それまで母親が全部やってくれていたことを一人でこなさなければならなかった。料理ができないため、

食事は全てコンビニ弁当で手軽に済ませた。都会のテンポはどんな場面に於いても徳島よりかなり早い。それに

いていけず、栄養の偏りもあって、精神と肉体の両方に不調を来し始めた。「もう川島はダメなんじゃないか」とヒソヒソ言われるくらい、調子が落ちた。

米倉ジムは4部制で、それぞれ練習している人数よりもサンドバッグの数がない。当然、サンドバッグの取り合いいになる。成績が良ければ誰が使っているかが「どいて」と割り込んで使う。成績が不振だと後輩にさえも「どいて」と言われてサンドバッグを奪われる。

「アマチュアのエリートが落ちると大変なんです。メンタル的にもやられてしまし、それが体にも出てくる。それまで50・8kgのフライ級にいたんですけ

ど、気がつくとも60kgになってました」

もがきながらの日々だったが、ボクシング以外にすることはなかった。遊びに出かけるでもなく、コンビニでバイトをする他は目白にあるジムと上野毛の寮の往復だけだった。追い詰められながらも腐ることなく、トレーニングを続けた。

「世界チャンピオンになったとき、このボクシングを周りに伝えたいと心底思ってたんです。で、27歳の2月の試合を最後に現役を引退。30歳でジムを開きました」

2年余りのブランクは、ジムを開くための準備に充てていたのかと思いきや、「ちょっとだけタレントしてました(笑)。ドラマや映画に出たりバラエティ番組にも出たりして。もちろん、ボクシングの解説もやりましたけど」

先輩の紹介で知り合った奥様との間に大学生になる男の子がいる。ボクシングに興味はないそうだが、最近、トレーニングに関心があるようで、ジムの営業が終わってから体を動かすにきているという。「一緒に走ったり筋トレ

したり。何となくオヤジに近づいてきてくれるなつて感じますね」。男同士、一緒に汗を流すことで縮まる距離もあるのだろう。息子の話をするときに見せたシャイな笑顔は穏やかだった。

父親への反発や反骨精神で頂点を目指してきた彼には、少し心が痛む記憶がある。世界戦でチャンピオンになったときのこと。リング下にいた父親が、息子の勝利に感情を爆発させてリングに上がってきた。おそらく手塩にかけて育てた息子が世界チャンピオンになったことが、心底嬉しく誇らしかったのだろう。ところが彼はリングから降りろと言わんばかりに父親を押し戻してしまったのだ。その様子は生放送でしっかりと映っていた。

「まだ若かったし尖ってたこともあって、オヤジのおかげで勝ったわけじゃないという思いが強かったんだと思います。今思えば申し訳ないことをしたなど」

徳島へは時々、ボクシングのイベントで帰省する。そのイベントで出会った牟岐の少年にリモートでボクシング

を教えることもある。「ラインでボクシングの動画を送ってもらって、アドバイスしてます。強くなりたいという夢を叶える手助けができれば嬉しいですね」

川島ジムでレッスンしてきた「ウチの子」が、海陽町でジムを開く準備が進んでいる。早ければ年内。彼もサポーターする。「徳島だけでなく四国はボクシング熱が弱いのでもっと熱量を上げたい」と言う。そんな彼が描く夢は、「世界チャンピオンを育てたい。今年はインターハイが四国で行われるので、高知や愛媛にスカウトに行く予定にしています」

子どもの頃、5分に1回の間隔で流れると言われた流れ星を見る度に「世界チャンピオンになれますように」

と願い事を呟いていた。そして今、世界チャンピオンを育てようとしている。  
 (取材・文／北島由記子 写真／永井守)

